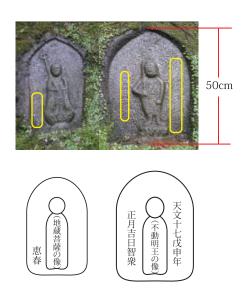
III 尻 北 0) 谷 崖 仏

所 年 分 在 代 類

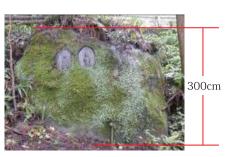
川尻北の谷 天文十七年(一五四八) 磨崖仏

左に地蔵菩薩の立像を薄肉彫りとしている。舟型を横に並べて二体彫り込み、右に不動明王、ので、道路からは見つけにくい。 川尻北の谷より中の谷へ向かう道路下にある 川尻北の谷より中の谷へ向かう道路下にある 彫り込み内には次のような刻銘がある。

(左側) 恵春 (左側) 正月吉日智衆 (左側) 正月吉日智衆







川尻打越阿弥陀三尊笠塔婆

所在 川尻打越年代 正平七年(二三五二)



地に移したという。 正平七年 見ずの観音さん」と呼ばれている。 地蔵様が光って鰯が取れないというので、 あったが、この山から見渡せる尼崎の漁師がお 尻では最も古い紀年銘である。 と川尻地区の裏山の天台山の中腹「石清水」に この石仏は、 (一三五二) に造立されたもので、 豊能 それ以来地元では 町 0) 民話」によると、 南北朝期の 「イワシ この Ш

で共に連座上に立っている。 がはっきり残っているため、 来迎印を結んでいる。 ているが次の刻銘がある。 な表現に親しみがある。下方は半ば土に埋もれ 力は稚拙な感じがするが、 团 中 央の阿弥陀立像は四頭身の像容で連座上に 一弥陀立像の右は観音菩薩、 頭頂部には枘 愛らしい面相や素朴 笠塔婆と思われる。 三体とも像の表現 左は勢至菩薩 (ほぞ)

敬白

正平七年壬辰三月□□

話によると「良円」であったという。願主 僧□□の二文字は以前読み取った人の願主 僧□□

笠石

使用しているのは珍しい。が北朝年号を使う中、大

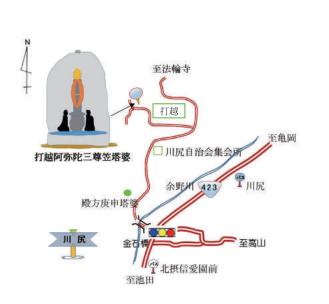
南

北朝期、

当地は北朝であったため、

殆んど

南朝年号の「正平」を





正平七年壬辰三月□□

願主

僧 | | 敬白

JII 尻 中 0) 谷多尊 石 仏

所年分 在代類 川尻中の谷 天正元年(二五七三) 多尊石仏



来迎三尊の形式で、 阿弥陀、 薩の位置は一番低くなっており、 表したものと考えられる。 両脇侍を従えて、往生する人を迎えに来る形を は蓮台を手に体を右に向けている。 至菩薩で体を右に向けている。 主 |尊の阿弥陀立像は来迎印を結び、 一段より五・六・五体の計十六体彫られている。 尊立像が上段に、 当 川 地に多くある石英閃緑岩の自然石に阿弥陀 尻中の谷氷川 観音と順に斜めに並んでいる。これは 一神社跡参道の傍らにある。 西方浄土より阿弥陀仏が 下部三段に地蔵座像が、 右側の観音菩薩 左から勢至、 この観音菩 左側が勢

ら供養者ではなく、 修仏と思われるが、 下 阿弥陀仏の両肩部に次の刻銘がある。 部の十六体の地蔵は造立願主それぞれの逆 地蔵像と考える説もある。 いずれも蓮華座に座す所か

(右面) 為□□□

天正元年 (一五七三)

八月十五日

左面

注)□□は逆修と考えられる。

北の谷磨崖仏 中の谷多尊石仏 光明真言板碑 中の谷 至亀岡 川尻自治会 集会所 打越阿弥陀三尊笠塔 注 天正元年(一五七三) 八月十五日 川尻 □□は逆修と考えられる。 殿方庚中塔 金石橋 至池田

川尻中の谷光明真言板碑

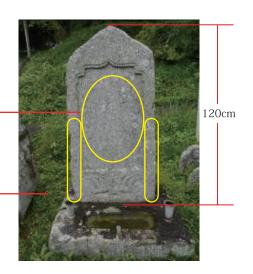
所在 川尻中の谷 年代 寛文十二年(一六七二年)



尊は大日如来あるいは阿弥陀如来である。諸々の罪報が除かれるといわれる。光明真言本羅尼を唱えることによって、仏の光明を得て、光明真言は密教で唱える真言の一つである陀

右側に の下に一字金輪の梵字、 真言を刻み、円外下部左右に「ソワ・カ」、そ と記す。 十五日廿三人敬白」と刻んでいる。寛文十二年 キャ・ベイ・ロ・シャ・ノウ・マ・カ・ボ・ダラ・マ・ニ・ 上部に、円形に左下から右回りに「オン・ア・ボ・ (一六七二) は、江戸時代初期である。 ハン・ドマ・ジンバ・ラ・ハラ・バ・リタ・ヤ・ウン」 したものである。 一愛染明王」「不動明王」の各梵字を刻んである。 Ш 尻中の谷の板碑は、 「寛文十二年念仏同行」、左側に「二月 同じく梵字で円内に胎蔵界大日如来の 碑の高さは約一二〇㎝、 この陀羅尼を梵字で記 また、それらの左右に 正面

寺西之坊、木代に善福寺があった。川に高代寺がある。江戸時代には、余野に無本本町の真言宗寺院には、川尻に法輪寺、吉





川尻殿方庚申塔婆

府

道

四号

線の脇に庚申塔婆が建っている。

庚

所在 川尻殿方年代 享保七年(一七二二)

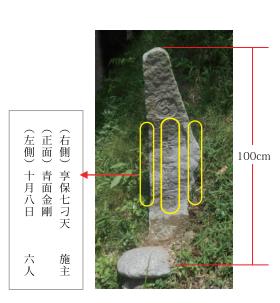


する。 事を庚申待といい、江戸時代、 Ų が除かれるとの伝えから、 ある。 申 村では豊作を願う行事となり、 組織がすすんだ。 信 物 仰 庚申の は、 語や遊芸を楽しむ行事を行った。 平 日の・ 安時代に中国から伝わったもので 夜、 庚申塔婆の建立もこれに由 眠らずに身を慎めば災 人々は酒食をともに 町では商売繁盛、 各所で庚申講の この 来

字や青面金剛像を浮彫りにしている。舟形碑などがあり、庚申・青面金剛などの文舟では、一般には自然石のほか宝塔・方形碑・

文字を刻み、両側に「享保七刁天(年の異体字) 金剛は庚申待に祭る本尊名である。 ·月八日」「施主六人」と刻まれている。 Ш 正 尻 面に地蔵の梵字「イ」と「青 の庚申塔婆は、 高さ約一〇〇 cm 面 金 O剛 自 1 然 石 青 面 0

(※刁は「寅」、天は「年」の異体字)





川尻法輪寺宝篋印塔

所年分

在代類

川南宝尻北篋

凡法輪寺境内 北朝後期と推宕 圏印塔

定



観音堂の前



境内の築山

中 に連なる標高 腹にある真言宗の大きな寺である。 法 輪寺は、 六〇〇 豊能町の mの光明山・ 中 -央を流 れる余 天台 野 Щ [連峰の Ш 0 西

があるほかは全く同じである。 とれぞれ約一五〇㎝、形も細部にわずかな違いり、もう一基は観音堂の前にある。二基とも全り、もう一基は観音堂の前にある。二基とも全な宝篋印塔が二基ある。一基は築山の中にあるの寺の境内に南北朝期の造立と見られる完

ついている。 飾は三弧になっていて輪郭がある。 に金剛界四仏の梵字を薬研彫りにしている。 華 軒下に二段、 座を浮彫りして、 基 礎は三面に格狭間があり、 塔身の四方にはそれぞれ七弁の 上に六段の段形があり四隅 その上に月輪を線刻し、 上端に反花座が 0) 隅 笠 内 蓮

る。 富み、 が浮彫りになっていることや、 ていることである。 この二基の塔の特色は、塔身四方仏の 隅飾も二弧が普通である。 南 北朝も後期のものであろうと考えられ 一般的に塔身の蓮 隅飾が三 少し装飾性に 華 一弧になっ 蓮 座 は 華 線 座



一部地中に埋まる





$\|$ 尻 法 輪 姬 0) 塔

所 年 分 在 代類 宝篋 尻法輪寺境内 及び南北朝中期と推定和四年(二三五五) 篋印塔・五輪塔



であるが、 の塔と呼ばれている三基の宝篋印塔がある。 重な資料となるものが数点ある。 れも寄せ集めの塔で、 Ш 尻の法輪寺の下、 この中に石造美術を研究する上で貴 府道四号線の脇に法輪 年代もまちまちのもの 姫 V

185cm

ず

すべきものである。 の隅飾が三弧で、 る特殊な格狭間の形は、 北朝中期一三五五年である。 年乙未」「三月三十日」とある。 しい文様 面に四行で「敬白」「法輪寺」「文和二二(四) 央塔の基礎部に文和四年の銘文がある。 (渦巻紋) 法輪寺境内の二塔と共に注目 である。 全国でも類例のない珍 また、 更に他の三面にあ 文和四年は この塔の笠 背 南

の格は なもので、 Щ があったと見られる。 体字で中世中頃この地に大岡氏という有 沙 流域に数例ある中の古い例の一つである。 弥 狭間は普通型だが、 れらの三基はいずれも南北朝中期の 側の塔の基礎と笠も貴重である。 西 阿」「大咫尼女」とある。 三弧の輪郭内にある渦巻紋は、 この塔の笠の隅飾 背面に三行で「 足は 岡 基 力士族 一礎 は 願 もの の異 主 珍 猪 重 面 名

(裏面)

三月三十日 文和寺 二二年乙未

※二二は四の異体字

192cm



とから、

それぞれの塔が寄せ集めて組まれているこ

これ以外にも複数の塔があったことが

わかる。

(裏面) 大沙願 焸弥主 尼西 女阿

III 尻 北 0) 谷多尊 石 仏

の丘にこの多尊石仏がある。川尻北の谷の法輪寺へ上る

北の谷の法輪寺へ上る道の左側、

ヒノ 程の

丰



彫られている。

平らな表面を四段に区画し、

最

上段には定印阿弥陀座像が、

右に

観音菩

板状岩に二二体の石仏と三基の五輪塔が薄肉に

高さ一一〇㎝

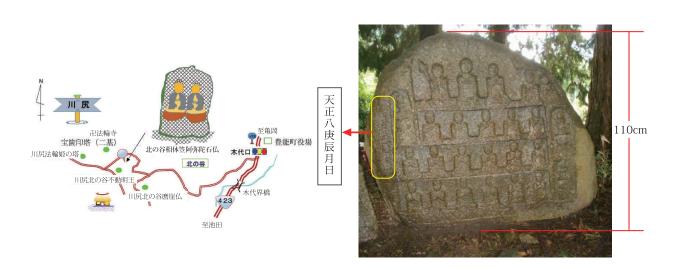


を表しているものと考えられる。 となりに二体、下三段に一七体と計一九体の同 どに変えているところに特色がある。 じ様な円頭合掌像が並んでいるが、 脇侍は観音、 左に地蔵菩薩が配置されている。 勢至菩薩であるが、これを地蔵 普通阿弥陀 これは地 脇侍の右 蔵 な 0)

時の造立願主である結衆講員の逆修仏と思われ ることができる。 たものと思われ、 この地蔵群像については、この石仏を造った 左右の五輪塔は講員中の化仏者三人を表し 総員二二人の造立主を想定す

輪塔に向って左上には次のような刻銘がある。 桃山時代天正八年 (一五八〇) の造立であり、

天正八庚辰月日



川尻北の谷双体阿弥陀笠塔婆

形の石に半肉彫り川尻北の谷の名

尻北の谷の多尊石仏の側にある。

小さい

舟

りの阿弥陀坐像が二体並んで彫

られている。



所在 川尻北の谷年代 室町後期と推定分類 笠塔婆室

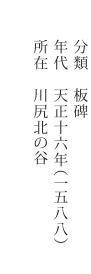
出し、 る。 れる。 ている。 膝張りを小さくして、 いたものと思われる。 像は、二六・ 舟形の石造りは上部を湾屈したように作り その頂部に小さい「枘」(ほぞ)が彫られ 造立当初は、 Ŧi. cm0) 造立は室町後期と考えら ここに笠石がのせられて 阿弥陀の定印を結んでい 高さで、 口元をひきしめ

る。村人等の暮らしの息吹が聞こえてくるようであために造ったものか定かでないが、、数百年前のか、可愛い二人の子どもを亡くした親が供養のか、可愛い二人の子どもを亡くした親が供養の





Ш 尻 北 の谷 板 碑

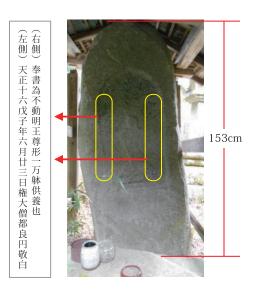


の中に火焔を背にして不動明王が岩座に立ち、高さ一五三㎝の自然石に舟形を浅彫りし、そん谷の不動さん」と呼ばれている。 出地の人から「北川尻北の谷の道端にある。土地の人から「北

北

かる。
年(一五八八)に造立したものであることがわ年(一五八八)に造立したものであることがわ奉った供養のために、権大僧都良円が天正一六 刻銘からこの像は、 権大僧都良円が天正一六、不動明王一万体を書き 王一

(右側) (左側) 明 円敬白 天正十六戊子年六月廿三日権大僧都良 奉書為不動明王尊形一万躰供養也 7王の像の左右に)





川尻北の谷大峰供養塔

所在 川尻北の谷 年代 享保九年(二七二四) 分類 宝篋印塔



呼ばれ に享保九年 の経典を読むのと同じ功徳があると記し、 まれ、 旨が刻まれている。 読誦すれば、 た上に建っている。 したことが刻まれている。 三度登拝した記念の供養として造立した旨が 七三 Ш れる宝篋印塔がある。 尻 cm 東面にはこの塔に宝篋印陀羅尼経を安置 北の谷の不動明王の横に、 切石二段の上に反花座 〇七二 過去・現在・未来の諸仏のすべて 塔の基礎南 四 願主大岡氏が建立した 相輪上半を失い現 そしてこの経 面に大峰 大峰供養塔と 請座を重ね を一度 Щ 北面 に三 刻 高

の目的のために造立されたものである。 篋印陀羅尼経を塔内に安置した宝篋印塔本来塔としての性格をもつのに対して、この塔は宝塔としての性格をもつのに対して、この塔は宝塔としての性格をもつのに対して、江戸期

る。 近くの法輪寺には南北朝時代の宝篋印塔がある。 また、法輪寺、法輪姫の塔と比べる がある。また、法輪寺、法輪姫の塔と比べる を中世と近世の宝篋印塔の大岡氏と関連がありそ がある。 がある。

(※ 定は「岡」の異体字)

173cm

(右面)奉造立寶塔一基 安量宝篋印阿羅 一卷經是為讀 誦 一卷經是為讀 誦

(正面) 右意趣者致 供養者也 性養者也 在大僧都 在大僧都

u)享保九辰年 霜月吉祥日 服主 古祥日 大岡氏 十

(裏面)

佛所説經典

JII. 尻 向 井 山 地 蔵 石 仏

し入った右側に、

享保七年

(一七二二)

銘の 宝 少

玉

道四二三号線金石橋から府道

四号線を

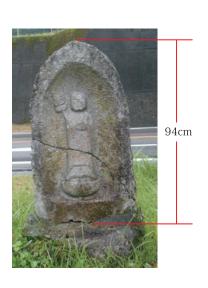


在代類 尻町蔵 山定

表に舟 惜しいことに碑の中ほどで二つに割れている。 像高四六㎝の地蔵菩薩を厚肉彫りする。 柄の短い錫杖を持ち、左手に宝珠を捧げている。 篋印塔と並んで一基の地蔵石仏が建っている。 石で、 この石仏は、 形の彫り込みを造り、 石の高さ九四 花崗岩製の台石の上に立つ舟形 cm 幅約五二㎝である。 中に蓮座上に立つ 右手に

傷しているものの穏和なうちに厳しさがある。 はないが、 一町前期のものと推定される。 この地蔵は北方の切畑法性寺の正和三年 法 四 性寺地蔵・下所地蔵に続く系統のもので、 銘の地蔵とよく似ている。 すぐれたものである。 お顔は少し損 豪健な感じ





Ш 尻 向 Ш 宝 筬 印 塔

所年分 在代類 川享宝 川尻殿方向井山亭保七年(二七二二)玉篋印塔

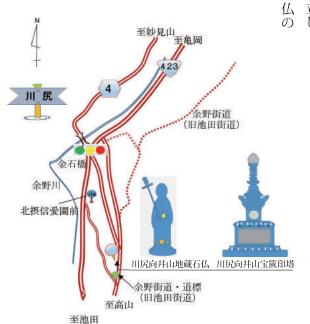


篋印陀羅尼経が納められたことに由来する。 塔として造られた。 篋 印塔は塔婆の一 種で、 宝篋印塔の名は内部に宝 中 世 以降おもに 石

がある。 る。 た塔である。 極端に張り出しているのが江戸時 相 輪と区分される。 塔 この宝篋印塔は、 の構造は下から基壇、 基壇が幾重にも設けら しかし形式には時代の その特徴を最もよく備え 基 れ、 礎、 代の特徴であ 笠の隅飾が 塔 身、 特徴 笠、

り、 チリヤ」 梵字が刻まれている。 基礎正面に宝篋印塔陀羅 たことがわかる。 門満 この塔は、 享保七年 雅が現世安穏、 を刻んでいる。 高さ二一〇 (一七二二) 塔身四面にも、 後世菩提を祈って建立し cm 他 で、 に当 心の三面 尼経を表す梵字「シ 花 地の塩山 崗岩製である。 金剛界四仏の にも刻銘が 出次郎左 あ







川尻旧池田街道の道標

所在 川尻殿方向井山年代 正徳四年(二七一四)分類 道標

は、 い道路がつくられた。 ている。 によると、 池 古くから丹波亀山と摂津池田を結ぶ街道で 田 街道と呼ばれ 天保八年(一八三七)の余野村 明 治期には旧道にほぼ平行して、 道幅は四尺 た余野 (約一・二m) と記され Ш 沿 いのこの 明細 街 帳 道

期以降 は ある。 に 旅人の安全を祈願して建てたものである。 村 来 また正面上部に梵字を刻むのも印象的である。 年(一七一 内の集落であり、 を表す梵字 正 石 旧 在所」で、「むら里」を指す。 の高さは七七㎝ 池田街道の各所に残る道標は江 「かめやま」は「亀岡」のこと、「さい志よ」 徳四甲午六月 のものが多いが、 四)造立のものである。 ア 村人が、 日 (地上部)、 左ハさい志よ 川尻の道標は、 施主殿 京・丹波に向かう 自然石を用い、 方 正面に大日 ミち」、 殿方は川 の刻銘 戸 時 正 右 徳四 代 尻 面 如 末 が





(正面)「ア」梵字 左ハさいぎょ ミち(右面) 正徳四甲午六月日、施主殿方